

JAL2015 招へい者の提言に応答することの試み

JAL2015 は 2015 年 11 月 27 日の公開ワークショップ（以下、WS2）をもってすべての日程を終了した。その後、オープンの懇親交流会および送別会において、WS2 出席の日本の関係者、JAL2015 実行委員、コメンテータ、プログラムコーディネータは 9 名の招へい者との別れを惜しみつつ、多岐に渡って交流の時間を持つとともに、日本と海外との日本美術の資料情報の交換、共有について、課題や展望、希望と本プログラム自体への感想、リクエスト、注文など、さまざまな意見交換があった。

初年度においては、すべてが手探りで、同じように最終日にワークショップを開催して送別会をもって終わり、そして次年度（2015 年）への新たな申請の作業と報告書の作成に突入し、JAL2014 自体についての振り返り、総括する時間を持つことにおいて十分ではなかった。

その轍を踏まないために、12 月 9 日、実行委員長、実行委員およびコメンテータは再度、東京国立近代美術館に集まり「JAL2015 事後意見交換会」を開いた。

JAL2015 のプログラムについては：

- 募集に関わる広報および要項の記述のあり方
- 招へい者の現地ヒアリングの日程とその成果のフィードバック
- 招へい者による研修日程、訪問機関の数と内容の妥当性
- WS2 の時間配分
- WS2 における日本語と英語のバランスおよび通訳のあり方
- プログラムコーディネータの役割

など多くの指摘をいただいた。

なかでも、「プロジェクトの成果とは、招へい者が日本で学んだことを生かすことと、日本が招へい者から提言されたことを受け止めることの 2 本立てである」という出席者の指摘から、特に招へい者の「提言」への「受け止め」を「提言」への「応答の試み」として位置づけ、実行委員各人から後日「応答の試み」を文章化していただいた。

実行委員（川口、谷口、山梨、橘川、江上、栗田）から提出された文章をもとに、水谷が若干の追記と取りまとめをしたものを以下に記す。

ただし、この「応答の試み」によってすべての「日本美術の資料に関わる情報発信力の向上のための提言 II」に答えられるはずはないし、機関・組織的対応における現実的措置を確保してのものでもないこと、そして提言から誘発される課題の明確化の試みのレベルに止まるものであることを、あらかじめお断りしておく必要があるだろう。

JAL プロジェクトにおける海外からの提案に対する「応答の試み」は、現状、下記のように課題の列記にならざるを得なかったが、ここに記録として留め、なおかつ今後の指針の一端になることを願うものである。

1. 日本の美術情報資料に関わるデータベースの課題

1.1 日本の美術情報資料のデータベースはどこにあるのか

インターネットで公開されていても研修先に実際に行って初めて知るデータベースがほとんどであり、かつ数多くあったという招へい者の声から：

- 日本のデータベースが“引きこもり”型の情報発信であることから脱する必要がある
- 日本美術のためのポータルサイトを多言語で構築する必要がある

- 利用についてユーザの利用行動の検証が必要である

1.2 なぜ日本の美術情報資料のデータベースは使いづらいと感じられたのか

- 言語の問題もあるが構成とインターフェースにおいて海外の類似データベースとの相対的な比較をしたことがないのではないか
- 海外の利用者の情報行動、操作アクションについてイメージしたことがない
- 国際標準と目される美術情報資源（Getty, Art Discovery Group Catalogue etc.）などについてサイト構造の分析の必要がある

1.3 日本の美術情報資料は誰に向けてのものなのか

- この問いは国内においても往々にして問われることである
- 美術情報資源のデータベースのターゲット・ユーザは誰であるかの見直しが必要である
- 専門研究者と愛好者の双方に対応するインターフェースを作る可能性についての検証が推奨される

2. ローマナイズの必要性の指摘

図書館システムであれ作品のためのデジタルアーカイブのシステムであれ、「餓鬼草紙/ Gaki Zoshi / Stories of Hungry Ghosts」「睡蓮/ suren/ water lilies」のように、三種の表題の文字列を持つシステムは少ない。国際日本文化研究センターの OPAC はローマ字を持つが機械処理であることにより限界があったり、長音記号など一律ではない。JAL2014 でも指摘のあったこのローマナイズの必要性の指摘であるが、日本国内においては、この点に課題のあることの認識が依然希薄であることもまた、ここに記録する必要がある。

3. 応答することの窓口の不在

招へい者が WS2 のほとんど最後の時間に口にしたのが、「英文での問い合わせであってもどのような回答であれ何かしら答えて欲しい」というものであった。かつ川口委員が指摘したように英文サイトにおいても問い合わせ対応の窓口が不在である機関が多いということである。まずはこの「鎖国」状態からの開放が求められていることを確認する必要がある。

4. 著作権とオープンアクセス

特別招待講演のマクヴェイ山田氏、そして昨年の招へい者である岩瀬加奈子氏の指摘した通り日本美術の画像についての利用許諾の複雑さなどの課題は重ねて議論の対象となった。加えて、日本美術に関わるあらゆる情報資料の局面でオープンアクセスのリソースが東アジアの他国のコンテンツに比して脆弱であることが、研究の対象化を妨げ、リソースのない分野への研究忌避の動向がいよいよ顕著になりつつあることの危機意識を持つ必要がある。

5. アート・アーキビストの配置の必要

アーキビストの配置とアーカイブのグローバル対応の情報発信の必要が、いま旺盛な勢いでアート・アーカイブの形成を目指しているソウルから指摘された。

以上
文責：水谷長志